

# 日本禪家における三教一致説批判

——道元禪師とその門流について——

大谷 哲夫

(一)

夫永平正法眼蔵。高祖曰。杜撰之輩曰。道教儒教釈教其極致一揆。或曰。如鼎三脚。是大宋諸僧所盛談。若如是彼輩上決仏法。弘地滅没。孔老道道未可同阿羅漢。況及等覺妙覺哉<sup>①</sup>。

これは、道元(一一二〇〇～一一二五三)禪師の遠孫である万仞道坦(一六九八～一七七五)師が江戸時代も後期にあたる明和六年(一七六九)に撰述された『三教一致辨』の冒頭の部分である。

この『三教一致辨』というのは法語として漢文体によって著述されたものであり、その字数はわずか一二〇〇字ほどの小編ではあるが、洞門においては、所謂の儒・道・仏の三教一致説あるいは合一論に対し、それを正面切って論駁をしているのは、後述するところに明らかのように、宗祖としての道元禪師が、その著『正法眼蔵』(以下『眼蔵』と簡稱する)の諸卷、特に「仏教」「諸法実相」「四禅比丘」等の諸卷において、それを徒論であり謬論であり虚説妄説であると口を極めて排斥して以来、近世に至っての、この『三教一致辨』と甘雨為霖(一七八六～一八七二)師の『三教辨惑』のほかは寡聞にしてその存在を知らない<sup>②</sup>。

万仞師は如何なる論拠なり典拠をもって、またこの時代に如何なる理由をもって三教一致説に対して弁駁を加えているのであろうか。

師は後年、卍山（一六三六―一七一五）・面山（一六八三―一七六九）両師等と相並んで洞門正統宗学の祖と仰がれるが、師が生涯その参究に最大の力を注いだ『眼蔵』がその論拠であり典拠となっているであろうことは冒頭のその語句の中に判然とみられるように論を俊たないところである。

そこで、まず最初に『三教一致辨』を著述する論拠なり典拠となつていふと思われる道元禪師の『眼蔵』にみられる三教一致説批判とは一体どのような趣旨をもつものであるのかを瞥見しておく必要がある。

(二)

道元（一一〇〇―一二五三）禪師には、所謂の儒・道・仏三教一致説に対する極めて鋭い仮借のない批判がみられる。その舌鋒は峻烈を極めるものと云つても過言ではない。道元禪師は『眼蔵』の中で三教一致説を批難して次のように云われる。（以下の引用は岩波版『正法眼蔵』による）

近來大宋国杜撰のともがら、落處をしらず、宝所をみず、実相の言を虚説のごとくし、さらに老子・莊子の言句を学す、これもて仏祖の大道に一斉なりといふ。また三教は一致なるべしといふ。あるいは三教は鼎の三脚のごとし、ひとつもなければ、くつがへるべしといふ。愚癡のはなはだしき、たとへをとるに物あらず。かくのごときのことばあるともがらも、仏法をきけりとゆるすべからず。

〔諸法実相・中・二三九〕

さらにこの言を承けて

もし決定して三教一致ならば、仏法出現せんとき、西天に儒宗・道教等も同時に出現すべし。しかあれども仏法は天上天下唯我独尊なり。かのときの事をおもひやるべし、わすれあやまるべからず。三教一致のことは、小児子の言音におよばず壊仏法のともがらなり。

と指弾している。

道元禪師の三教一致説に対する批難のことは極めて激越であるが、そうした批判の語は「四禪比丘」巻になるとさらに激しさを増している。その幾つかを列挙する。

いま大宋国のともがら、おほく孔老と仏道と一致の道理をたつ、僻見もともふかきものなり。しもにまさに広説すべし。

〔四禪比丘・下・二一四〕

いま大宋国に寡聞愚鈍のともがらおほし。かれらがいはく、仏法と孔子・老子の法と、一致にして異轍にあらず。

〔前同・二一四〕

あはれむべし、震旦小国辺方にして、三教一致の邪説あることを。

〔前回・二一七〕

たなごころをみるよりもあきらかなる諸仏菩薩を、孔老等に比類せん、愚闇といふにもたらざるなり、みみをおほふて、三教一致の言をきくことなかれ、邪説中最邪説なり

〔前同・二一八〕

いま遼運の衆生、宋朝愚暗のともがらの、三教一致の狂言もちるるべからず、不学のいたりなり。〔前同・二二五〕と見られるのがそれである。

「四禪比丘」の巻において、道元禪師は右のごとく三教一致説を批難しながら、その中で孔老の学すなわち儒教・道教と仏法の関連性、さらには仏法が如何に優れているかを幾たびも語を変えて強調していくのである。

孔老にかくのごとくの功德いまだなし。仏法を習学せんもの、たれか孔老を測度せざらん。孔老を習学するもの、  
仏法を測量すること、いまだなし。

〔四禪比丘・下・二二四〕

孔老等いまだ一世のうちの前後をしらず、一生二生の宿通あらんや。いかにいはんや一劫をしらんや、いかにいはんや百劫千劫をしらんや、いかにいはんや八万大劫をしらんや、いかにいはんや無量劫をしらんや。

〔前同・二二八〕

学者あきらかにしるべし、孔老は三世の法をしらず、因果の道理をしらず。

〔前同・二二二〕

右と同じ語は

学者くらきによりて、諸仏にひとしむる、迷中又深迷なり。孔老は三世をしらず多劫をしらざるのみにあらず。

〔前同・二二二〕

孔子いまだ応述の説なし。いはんや孔老は、先因をしらず、当果をとかず、わづかに一世の忠孝をもて、きみ  
につかへ、家ををさむる術をむねとするなり、さらに後世の説なし。

〔前同・二一六〕

とみられ、さらに「莊子」に対しても「莊子曰く、貴賤苦樂、是非得失、皆是<sub>レ</sub>自然」を引いて、それを「この  
見すでに西国の自然見の外道の流類なり」として、

貴賤苦樂、是非得失、みなこれ善悪業の感ずるところなり。満業・引業をしらず、過去来世をあきらめざるが  
ゆゑに、現在にくらし。

〔前同・二一八〕

と見出すことができる。このような見解は他の諸巻にも習見するところである。

孔老の教は、わづかに聖人の視聴を、天地乾坤の大象にわきまふとも、大聖の因果を、一生多生にあきらめが

たし。わずかに身心の動静を、無為の為にわきまふとも、尽十方界の真実を、無尽際断にあきらむべからず。おほよそ孔老の教の仏教よりも劣なること、天地懸隔の論におよばざるなり。〔仏教・中・二六四〕

因果の道理は、孔子老子等のあきらむるところにあらず、ただ仏仏祖祖あきらめつたへましますところなり。澆季の学者、薄福にして正師にあはず。〔深信因果・下・二〇七〕

と見られるのがそれである。

すなわち、道元禪師は儒教を「一世の忠考をもて、きみにつかへ、家ををさむる術をむねとす」とし、道教を「身心の動静を、無為の為にわきまう」ものと規定し、孔老の学は三世にわたる教ではないから因果を説かないと断定するのである。

たしかに、儒教というのは、儒学あるいは儒家思想というのと大差はなく、その説くところは身分の尊卑と人間の仁愛を根本とし、修身・齐家・治国・平天下の道を講ずる一種の倫理学・政治学であって宗教ではないのは周知されるところである。

一方、道教というのは、老子を神格化して太上老君もしくは太聖高上大道金闕玄元皇帝などと崇拜し、或はそれを祭祀する廟観や、それに奉仕している教団などを有している宗教である。<sup>③</sup>だが、中国古来の両者の伝統的な教説は、人生を苦と規定し、そこからの解脱を説くものではなく、また因果の道理を説かないし、三世にわたる教説ではないことは事実である。

したがって、儒・道・仏を鼎立させ、その極致は一同であるとする三教一致説は、道元禪師にとっては、それが宋代思潮の一大動向であればあるほど容認し難いものだったのである。それは、解脱道としての仏教の特色をみ

ずから否定し、仏教を道德の線に引き下げる傾向をもつことになるからにはかならない。この点こそが道元禪師が儒・道二教の特質を判然と把握した上で三教一致説を舌峰鋭く排斥した要因の第一<sup>⑤</sup>であろうと思われる。

したがって、三教一致説を標榜する僧侶に対しては先にみたごとく、「壊仏法のともがら」「杜撰のともがら」と一蹴するのであるが、彼等をさらに激しく排撃する。道元禪師は、それを智円・正受であるとし、

大宋嘉泰中、有僧正受、撰進普燈錄三十卷、曰、臣聞孤山智円之言、曰、吾道如鼎也、三教如足、足一虧而鼎覆焉。臣嘗慕其人、稽其說、乃知儒之為教、其要在誠意、道之為教、其要在虚心、釈之為教、其要在見性。誠意也、虚心也、見性也、異名同體、究厥攸歸、無適而不中興此道<sup>⑥</sup>會

〔四禪比丘・下・二一四〕

と『嘉泰普燈錄』の序文を引用し、

かくのごとく僻計生見のともがらのみおほし、智円・正受のみにはあらず。このともがらは、四禪をえて四果とおもはんよりも、そのあやまりふかし。謗仏・謗法・謗僧なるべし。すでに揆無解脱なり、揆無三世なり、揆無因果なり、莽莽蕩蕩招殃禍、うたがひなし。

〔前同・下・二一五〕

とまで批難し、智円・正受への指弾の語はさらに激しく続く。

三教一致といふは、智円正受なり、後代澆季愚闇の凡夫なり。なんじなんの勝出あればか、上古の先徳の所説をさみして、みだりに仏法と孔老とひとしかるべしといふ。なんだちが所見、すべて仏法の通塞を論ずるにたへず、負笈して明師に参学すべし。智円・正受、なんぢら大小両乗すべていまだしらざるなり。四禪をえて四果とおもひしよりもくらし。かなしむべし、澆風のあふぐところ、かくのごとくの魔子おほかることを。

〔前同・下・二二六〕

仏法と莊老と、いづれが正、いづれが邪をしらず、混雜するは、初心のともがらを迷惑する、いまの智円・正受等これなり。ただ愚味のはなはだしきのみにあらず、稽古なきのいたり、顕然なり、炳焉なり。

〔前同・下・二二〇〕

しるべし、二祖すでに孔老は仏法におよぶことあらずと通達せり。いまの遠孫、なにとしてか祖父に違背して、仏法と一致なりといふや、まさにしるべし。邪説なりと。二祖の遠孫にてあらずば、正受等が説、たれかもちいん。二祖の児孫たるべくば、三教一致といふことなかれ。

〔前同・下・二二三〕

中国天台の無外智円（九七六一—一〇二二）は、『閑居編』等において周孔荀孟楊雄王通の外典に通じ、身を修むるに儒をもつてし、心を治むるに釈をもつてすべきと教禪一致の立場から見性を説き、三教鼎分不可廢説を立て、虚中正受は道元禪師の引用文の中にみられるように一鼎三足の説、つまり三教一致を主張したのである。

道元禪師はこれら智円、正受の語句こそが虚偽妄説であると断じて彼等を真向から排撃したのである。だが、そうした当時の三教一致説は、教禪一致を説く仏者によってのみ主唱されたのではなく、教外別伝を標榜する禪者によつても同じく唱えられるほどに当時の思潮を風靡していたのである。したがって、道元禪師のそれは当時の禅界の思潮へ激しい警鐘であるとともにそうした弊風を積極的に排斥しようとした意図を示しているともいえよう。それらは、三教一致説を批判したのは本師である如浄禪師であるとして次のように云っていると窺い知るを得る。

三教一致のことは、小児子の言音におよばず、壞仏法のともがらなり。（中略）大宋仏法衰薄の時節なり。先師

古仏、ふかくこのことをいしましめき。

〔諸法実相・中・二四〇〕

近日宋朝の僧徒、ひとりとしても、孔老は仏法におよばずとしれるともがらなし。なほ仏祖の児孫になれるともがら、稻麻竹葦のごとく、九州の山野にみたりといふとも、孔老のほかには仏法すぐれいでたりと曉了せる、一人半人あらず。ひとり先師天童古仏のみ、仏法と孔老と、ひとつにあらずと曉了せり、晝夜に施設せり。

〔四禪比丘・下・二二〇〕

以上、道元禪師の三教一致説に対する激しい批難のことばの幾つかを探ってきたのであるが、禪師のそれは三教一致説、それ自体をあくまでも邪説とし、「学者はやく、仏法と孔老と一致なりと邪計する解をなげうつべし。」「四禪比丘」・下・二二一）とするのである。つまり、儒教・道教を仏教に比較した上で、それを相対的に否定するものであつて、儒教・道教をそのものを全面的に否定しきつてしまふものではない。このことは次のようなことばの中からも容易に推察されうであらう。

かれらおのれが愚鈍にして仏教のころあきらめがたきをもて、みだりに仏経を謗す、さしおきて修習せず、外道の流類といひぬべし、仏祖の児孫にあらず、いはんや見仏の境界におよばんや。孔子・老子の宗旨になをいたらざるともがらなり。

〔見仏・中・三五二〕

孔・老・莊子・恵子等は、ただこれ凡夫なり、なほ小乗の須陀洹におよぶべからず、いかにいはんや、第二第三第四の阿羅漢におよばんや。しかあるを、学者くらきによりて、諸仏にひとしむる、迷中又深迷なり。

〔四禪比丘・下・二二三〕

道元禪師は、たしかにご自身の体得された、如浄禪師より嗣法した、純禪の正伝の仏法を唯一無二ものとされる。



そのような立場からすれば儒教の思想が、宗教としての道教が決して容認されうるものではない<sup>⑧</sup>。だからといって、俗世間に厳としてある儒教・道教を第三者的に真向から否定しているのではない。それは俗世間において、所謂の世間法として容認されているのであり、禪師はそれを否定しているのではない。批難攻撃するのはあくまでも三教を一致であるとするその説そのものなのである。

(三)

さて、先の万仞師の『三教一致辨』の冒頭の部分は『眼蔵』の「仏教」巻に

また杜撰のともがらいはく、道教儒教釈教ともにその極致は一揆なるべし、しばらく入門の別あるのみなり、あるいはこれを鼎の三脚にたとふ、これいま大宋国の諸僧のさかりに談ずるむねなり、もしかくのごとくいはば、これらのともがらかうへには、仏法すでに地をはらふて滅せり、(中略)孔老の道いまだ阿羅漢に同ずべからず、いはんや等覚妙覚におよばんや。

〔仏教・中・二六二〕

とある。これを万仞師は漢文体に直したものである。これによっても万仞師がその典拠なり論拠としたものは、宗祖としての道元禪師の三教一致説排斥の思想であることが判然としえよう。

万仞師はその冒頭の一節に引き続き、「或問」を設けて、

或問。若如永平高祖道如空寂所問經・起世界經・清浄法行經等之仏説亦謂杜撰之説乎。依此等經云。迦葉菩薩為老子。儒童菩薩曰孔丘。仏預遣弟子。漸漸教化。含其孝順<sup>⑨</sup>。

としているが、これも『眼蔵』の「四禪比丘」巻の

清浄法行経 曰、月光菩薩、彼称顔回、光浄菩薩、彼称仲尼、迦葉菩薩、彼称老子云々。むかしよりこの経の説を挙して、孔子老子を等も菩薩なれば、その説ひそかに仏説におなじかるべし、いとどまた仏のつかひならん、その説おのじかるべら仏説ならんといふ、この説みな非なり、古徳曰、準諸目錄、皆推此経、以為疑偽云々、いまこの説によらば、いよいよ仏法と孔老とことなるべし。

〔四禪比丘・下・二一六〕

とあるところに準拠していることは明白であろう。これは、道元禪師は『止観輔行伝弘決』巻第六の三に、清浄法行経云。月光菩薩彼称顔回。光浄菩薩彼称仲尼。迦葉菩薩彼称老子。天竺指此震旦為彼。准諸目錄皆推此経以為疑偽。文義既正或是失訳<sup>⑩</sup>とあるところに拠つて、偽経という観点から、それらの諸説を完膚無きまでに痛罵しているところである。

この「或問」はさらに言を継いで次のように云う。

又破邪論辨正論・永明之万善同帰集・日本弘法之三教指帰等皆取上件教説。

為法門證據。又大明毒峰之三教一理説。一元之三教真如本性説及三教鼎三脚譬如々居士之三教一理論。劉学士之三教平心論等之書。皆謂三教其本一致也。況元明之諸禪師多則有三教一致之説也。今永平高祖之説何甚相違耶<sup>⑪</sup>。

すなわち、法琳の『破邪論』等々、また日本の弘法の書とされる空海の『三教指帰』が、先の教説を取り上げて三教一致説の根拠としていること、さらには大明毒峰の「三教一理説」、一元の「三教真如本性説」、及び三教鼎脚

の譬、如居士の「三教一理論」、劉学士すなわち劉謚の『三教平心論』等の書が、三教のその根本は一致であるとして、さらには元明の諸禪師の多くに三教一致の説が存在するのであるとし、それが永平高祖の説と如何に相違するかと問わしめているのである。それに対応して万仞師は先に見た道元禪師の三教一致説批判の論拠なりを思想的背景として達意的に

仞曰。何相違之有。古曰。心疑生暗鬼。眼病見空華。所以者何。自己眼見不学不明。不能邪正分明見破也。<sup>⑫</sup>

と表現しているのである。三教の極致が同一であるとするのは自己の識見の不学不明のなせるところとは、道元禪師もそのように言明しているところである。さらに、道元禪師は、『所問経』等については、それを偽経という観点からそれらの諸説を完膚無きまでに痛罵したのであるが、万仞師は、

如其起世経・法行経・所問経等之所説。既曰。漸漸教化令其孝顺。人天对機之説。而非仏正法。仏始施權為顯実教。顯実畢則従前權法可謂白癩野干法。可謂増上慢法。<sup>⑬</sup>とそれを批難し、さらに、

法華曰。我九部法隨順衆生説。入大乘為本。天台曰。除諸法実相。余皆名魔事。<sup>⑭</sup>として、それを「教家尋常所談大概如是」とそれを断じ、さらに「況復可知儒家之所言耶」として、外典の『吳書』・『列子』・『金湯篇引周漢書』・「漢明帝の永平三年四月八日の夢」さらには『普曜経』『因果経』等の諸説によって仏教の優れたことを立証し、孔老の教について

如<sub>レ</sub>是則孔老法<sub>レ</sub>天求<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>天。天亦法<sub>レ</sub>仏求<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>仏。又求<sub>三</sub>先<sub>レ</sub>仏生<sub>二</sub>下界<sub>一</sub>夫如<sub>レ</sub>是。況老子唯以<sub>三</sub>谷神<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>道。孔子以<sub>三</sub>天理<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>道。而孔子未<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>天理之運用<sub>一</sub>。老子未<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>谷神之造次<sub>一</sub>。と批難するのである。

ところで、ここで問題となるのは次の二点である。

第一点は、道元禪師においてもみられたところであるが、儒教道教を「孔・老」もしくは「孔老の教」もしくは「孔老の道」といいかえている点である。厳密な意味からいえば、所謂の諸子百家といわれる儒家・道家における孔子・老子の思想との混用といえるであろう。特に、儒家における孔子はともかく、道家における老子・莊子の思想と、道教とのそれは厳然たる区別がなされなければならない。一方を単なる思想とするならば他方は先にもみたごとく宗教であるからである。さらに云えば、道元禪師においては

あはれむべし。よよに国主となれるやから、わがくにに重宝のあるをしらざること。ままに道士の教にまどはされて、仏法を廢せるおほし。そのとき袈裟をかけず、円頂に葉巾をいただく。講ずるところは延寿長年の方なり。唐朝にもあり、宋朝にもあり。これらのたぐひは、国主なりといへども、国民よりもいやくべきなり。

〔伝衣・上・一九六〕

この天童山は、もとは小院なり。覚和尚の住裏に、道士觀・尼寺・教院等を掃除して、いまの景德寺となせり。（中略）ある人いはく、かの道士觀・尼寺・教寺をうばひて、いまの天童寺となせることを記すべし。

〔行持・二九〕

とみられるように、当時、道元禪師の入宋時代、道教において「延寿長年」を講ずるのは道士であり、それを講

ずる場として道士観が存在したのであり、その現実味のある道教観<sup>⑬</sup>を道元禪師は持っていた筈であり、そういう認識のもとで、道教を老・莊とするいいかえは古来通例として行なわれてきたわけであるから容認はされえよう。が、万仞師の江戸時代も後期における師の道教観はどのようなのであろうか。はたして道教を現実味のある宗教として認識されたのであろうか。それは恐らく儒家（儒教）・道家としての程度、すなわち、それを思想としてのみ、文献的知識の理解の程度に捉えていた<sup>⑭</sup>のではないか、という危惧の念は払拭しえないところである。

第二点は、万仞師が『三教一致辨』の文中に「天」「天理」ともちいている点である。すなわち、近世朱子学の成立は、仏教的理念から儒教的（朱子学的）理念を独立させ、また「天」「天道」を朱子学の「天理」ととなえなおすことによってなされたものとされるが、<sup>⑮</sup>はたして旧儒教と新儒教との理念的相違が判然と認識されていたか否かは、この短文の中では不明である。勿論、この『三教一致辨』は近世という時代思潮の中の産物であるから、近世朱子学的捉え方ではあろうと推察はされえるのではあるが。

が、ともかく、万仞師は文を継いで次のごとく云う。

如<sup>二</sup>永平祖門<sup>一</sup>別有<sup>二</sup>天理谷神之運用造次<sup>一</sup>。有<sup>二</sup>天理谷神之説法度生<sup>一</sup>。有<sup>二</sup>天理谷神之  
発心修證。天理谷神之喫茶喫飯坐臥経行。孔老決未<sup>レ</sup>可知焉。豈孔老耳。宋明之禪  
師亦未<sup>レ</sup>可知焉。<sup>⑯</sup>

永平祖門の仏法の儒・道より正当で優位性のあることを、「説法度生」「発心修證」「喫茶喫飯坐臥経行」という宗義をもって結論づけているのである。すなわち、正法を普説することによって衆生を済度し、本証妙修の立場から、永平祖門の仏法は初発心から究竟涅槃まで連続する行持道環の世界であるとし、日常底そのものが仏法の世界で

あるとするのである。そして、その正法を儒教・道教においては説かないとし、ましてや、宋明代における諸禪師もあざかり知らないとするのである。さらに、そうした仏法を知らずして胡乱に三教一致説を説くものをして教<sub>三</sub>壞群徒<sub>二</sub>誹謗正法。是則仏家之怨魔。仏門蠱毒。阿鼻無間為<sub>三</sub>是等人<sub>二</sub>設者乎。と云っている。三教一致説を説くものの為に、五逆罪や謗法などの重罪を犯したものが墮ちるとされる極苦最悪の大地獄が設置されている、とこの一卷を結んでいるのである。

それでは何故に、江戸時代も後期である明和年間に、万仞師をして三教一致説を正法を誹謗するもの、仏家の怨魔、仏門の蠱毒とまで弁難せしたのであるうか。その論難に至る思想的な背景としては、勿論、万仞師の宗祖としての道元禪師の遠孫としての正伝の仏法に対する純粹なる帰趨と、禪師の激越なる三教一致説排斥の論が存在することは先にみた通りであるが、我国における、古くからの三教一致説の流布と、この万仞師の時代に蔓延した三教一致説、あるいは神・儒・仏一致論、あるいは儒・仏二教の合論等々を背景とした、その時代の思潮でもある排仏思想等をも看過することはできないであろう。

(四)

三教一致説あるいは儒仏不二説、儒仏合論、儒・道・仏三教の相剋というものは、その深源を求めれば遠く後漢時代にまで遡りうるとされるが、そうした思想が極盛となるのは宋代に至ってであり、それは禪宗が最も隆盛を極める時代とその機を一にしている。

この時代、道教はまた仏教に模倣して多くの偽経を造り、元代において黄金時代を作るべき素地を築き、儒教

は既に前代において漸く仏教を研究して新儒教を提唱するようになり、宋代に至っては仏教の研究ますます盛んにして遂にはその教理を取り入れて自然哲学を大成し、所謂儒教の黄金時代を作っていると云われている。<sup>①</sup>

けだし宋代において儒教が勃然として振興する原因については諸説があつて一定してはいないが、宋儒の仏教研究者としては、周濂溪、張横渠、陳堂中、張天覺、程明道、程伊川、楊龜山、謝上蔡、朱子、陸象山等々が挙げえよう。そして彼等所謂の宋儒は仏教就中禪を研究し、これを自己の藁籠中に納めて宋学を大成していくのである。したがつて、所謂の宋学は禪を基調としているだけに、これを極論すれば「宋学即禪」であると云つても過言ではないと云われる。そうした中であつて宋儒はかえつて仏教を排斥している。その代表的なものは歐陽修の『新唐書』であり、またその反駁論として典型的ものは契嵩の『輔教編』、張商英の『護法論』、万仞師のところにみられた劉謐の『三教平心論』等々がある。さらに云えば、儒仏二教の調和融合論が唱道されたり、あるいは道元禪師が批難した智円、契高、宗杲、懷璉等々によつて概括的に三教鼎分帰一説や並存不可廢説が立てられるという具合に、この時代の思潮は極めて複雑な状態を呈しているのである。

ところで、わが国において最も早く三教一致説を述べたのは東福寺の開山である弁円（聖一國師）であると思われる。それ以後、帰化僧の大休正念（文永六年、一二六九来朝）、無学祖元（弘安二年、一二七九来朝）、兀菴普覚（文応元年、一二六〇来朝）、明極楚俊（元徳元年、一三二九来朝）、清拙正澄（嘉暦元年、一三二六来朝）、竺仙梵僊（元徳元年、一三二九来朝）等々の諸師に三教一致説に関するものが少くなくない。<sup>②</sup> わが国の禅僧においては、不二道人と号した岐陽方秀（一三六一—一四二四）を代表として、所謂の五山僧、臨済系の諸師の多くに儒仏合一・不二・三教一致説が多くみられる。

このように、鎌倉時代から室町時代にかけて帰化僧によってもたらされた三教一致説はその時代の一つの時代思潮として存在したのであり、その影響は根深く近世にまで波及しているのである。換言すれば、三教一致説は中国においては、宋代の時代思潮の中に厳として存在したのであり、当然その影響を強く受けるわが国においても時代思潮の中の一流となっていることは十分に思考されてこよう。だが、早くからこのような思潮に対して、それは主として宋代の禪風に対してではあるが、「愚癡のはなはだしき、たとへをとるに物あらず」「三教一致の言をきくことなかれ、邪説中の最邪説なり」と口を極めてそれを排斥したのは先にみたごとく道元禪師であった。しかし、道元禪師の流れをくむ洞門においても、そうした時代思潮の影響が全く無いわけではない。それは近世に至って洞門の諸師の中にも散見されてくる。

古くは儒教・道教が判然とその対象として階次的に示されている『永平和尚業識図』<sup>②</sup>が存在する。そこでは、その第二編において「儒教に依つて孝悌を行なう」とし、第二編において「道教に依つて情欲を離れる」と判然と示している。この書は面山（一六八三―一七六九）師が『訂補建搦記』の巻末において「コノ外ニ、永平祖ノ作ト称シテ怪シキ書多シ……正法眼蔵、広録ノ家訓ヲ、一向ニ不知モノノ説ト見ヘタリ」とするのを俊つまでもなく、この書の作者は道元禪師の三教一致説排斥の思想に関しては全くの不知であったことは事実ではあろう。が、当時横溢していた儒仏不二あるいは三教一致説を勘案し、それ巧みにとり入れた構成をもつと思考するとき、面山の云うが如く、宗門的には唾棄すべきものには相違ないが、かえって当時の大衆に膾炙されたのであろうことは、承応年間（一六五二―一六五五）に早くも梓行され、さらに筆写が重ねられている事実がそれを何よりもよく物語っているとさえいえる。



さらに近世においては、儒教を完全に意識下におき、儒と仏を並列させ儒仏論を展開した独庵玄光（一六三〇—一六九八）師が<sup>②⑤</sup>おられる。師の『護法集』一六巻には儒仏論が習見されるが、就中『譚語』に至ってはこれ全編が儒教論であり、また『洩勃』はその序に「捩儒議釈」とされているように、ここには明確に、儒典の意義によつて仏教を解する格義的方法が示されている。しかし、こうした儒教的な背景をもつこの『護法集』は同じ洞門の捐翁宗益（一六四九—一七〇五）師によつて「護法集中、僻説に涉ること頗る多し」と誹謗されている。が、独庵師は当時の三教一致あるいは儒仏不二の思想に眩惑されてそれを云うのではなくして、そこには儒と仏との厳然たる区別がなされた上でのことであることは忘れてはならないであろう。

また、このような傾向は同世代の卍山道白（一六三六—一七一五）師にもみられる。師の郷党の俊秀で、平素より神明を敬い、儒教を尊崇するが仏道に至つては単にそれを敬するのみである長好なる人物が、

談次及乎三教者多矣。長好履引豊聰太子言曰、神道者根本。儒道枝葉。仏道者華実。其引之者。欲分先神次儒後仏之優劣而偏帰於神也。<sup>②⑥</sup>

と談じているところ、この三教は儒・道・仏ではなくて、神・儒・仏と日本的展開をみせていることは注意されなければならないが、それに対して、

予謂、此語誠出於太子之聖吻。其未必為分優劣。但示三即一体而不可剖判之微意也。<sup>②⑦</sup>

と言明しているところ、さらには

不可分先後。不可致優劣也著矣。仏之一乘、神之唯一、儒之一貫、自其専門之者言

之、則暫就己之所得。雖下分先後致優劣、亦不敢妨。（中略）若強設差降。任三月三舟之所見。則仏者父也。神者母也。儒者子也。有人踐五常之子道。而孝出世之父。事在天之母。不亦善乎。<sup>29</sup>

と云っているのをみると、卍山師が如何にも神儒仏合論的見解を呈しているかのようではあるが、

長好聞子緒言、少解顔采。乞受仏戒。歎然授付。因安法語為彌三。起德号称一源。<sup>30</sup>

とあるのをみれば、卍山師は当時の時代思潮をもって長好なる人物を巧みに接化しているのであって、卍山師が必らずしも神儒仏合論的見解を持っていた証左とはならない。が、当時の禅僧の多くは、そうした思代思潮の流れを十分に勘案していたことの確証とはなるであろう。

ところで、また、無隠道費（一六八八―一七五七）師には『心学典論』<sup>31</sup>四巻がある。これは当時の儒学の大家と称された物茂郷すなわち荻生徂徠への駁論であるだけに三万六千余字に及ぶ堂々たる論陣の書である。

師はその中の「儒教第十」において、

夫中夏有聖人之教三焉。曰孔子。曰老子。曰仏。孔子以儒術教天下者也。老子以虚無教天下者也。仏以諸法実相教天下者也。夫然後天下三教鼎足而立。聖人之道大備矣。<sup>32</sup>

として三教鼎立論の存在を示し、徂徠の儒学に対する薄識を痛罵しながら儒教論を展開し、「道教第十一」においては老子と仁義道德の関連性、徂徠の老子に対する批難の弁護、孔老二子の比較にわたって詳論し、「釈教第十二」において

自<sub>レ</sub>古世儒以<sub>二</sub>我教配<sub>二</sub>諸老莊。粗與<sub>二</sub>小乘余肖<sub>一</sub>矣。所謂管中窺<sub>レ</sub>豹時見<sub>二</sub>一班<sub>一</sub>者已<sub>③④</sub>。  
と合一論を否定し、さらに

今嘗試以<sub>二</sub>教參<sub>二</sub>於我<sub>一</sub>乎。夫論語孝經大略皆教<sub>二</sub>人倫之道<sub>一</sub>者。(中略)若<sub>レ</sub>此則二教未<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>我事理無礙法界<sub>一</sub>者也<sub>③⑤</sub>。

と云つて、仏教の儒教より優位なることを論述しているのである。

道費師が『心学典論』を撰述した由来は、

余又属覽<sub>二</sub>茂卿辨道・辨名者彼既已燥<sub>二</sub>思孟騷<sub>二</sub>諸儒糞<sub>二</sub>老莊其勢及<sub>二</sub>吾<sub>一</sub>仏。

とみられるように、徂徠がその著『辨名』『辨道』両書において子思・孟子等諸儒を否認し、老子・莊子を排撃し、その余勢をかつて仏教を排斥したものに對する論駁である故に、その対家とその主旨とは極めて明瞭である。同傾向のものでは太宰春台の『辨道書』に對する乙堂喚丑(一七六〇)師の『駁辨道書』<sub>③⑦</sub>があり、師は、春台が儒教的立場から神・仏を貶斥したのに對して、仏教の教理に基ずき、儒教とも對説しながら、春台は儒者でありながら聖人の道をも弁えぬものとまで糾弾している。

(五)

さて、近世、江戸時代の幕府統制の中で形骸化し形式化していく仏教に對する嫌厭不満の情は民心をして自ら儒教に向わしめ、その結果として排仏の思想が勃興し、それらに関する著述は、儒家・神道家・經濟学者及び政治家の間に夥しい数にのぼっているが、それら排仏論に對する弁護として三教一致説すらが出現しているとされる<sub>③⑧</sub>。

このような騒然たる時代思潮の過中であつて、万仞師が先にみた小編とはいへ『三教一致辨』を撰しているといふことは、元祿期に洞門を根底から揺がせた、所謂の宗統復古運動が幕府側の配慮によつて一応の結着をみせ、洞門においても、漸く宗学復興の氣運が高まりつつある時期であることを勘案するとき、万仞師のそれは、宗祖としての道元禪師の正伝の仏法をあえて、この時代の故にこそ挙揚せんとする護法上の、宗学上の基本的な態度の表明であると同時に、それは先述してきた時代思潮への警鐘であるとも認識されないことはないであろう。

万仞師の宗祖としての道元禪師の宗義を体した『三教一致辯』の主張は、さらに後代の甘雨為霖（一七八六一八七二）師に継承されている。師は『三教辨惑』<sup>39</sup>一卷を著してその冒頭、次のように云う。

釈孔老ノ教ヲ三教ト称シテ専ラ世ニ行ハル。此ノ故ニ古今ノ学者多ク此ノ三教ヲ説テ一致トナス、吾ガ宗祖道元禪師、正法眼蔵中ニ云ク、三教一致ノ論ヲナス者ハ、学仏道ノ外道ナリト。霖也多年宗祖ノ意ヲ敬察シテ其ノ的意ヲ探ル、因テ今、余力鼻徳ヲ述テ、祖門ノ学者ニ示ス<sup>40</sup>。

これは安政六年（一八五九）の撰述であり、これが梓行されたのは明治四年（一八七一）のことである。とすれば、この時代においてすら、三教一致に対して関心を持つ僧侶が洞門においてすら存在していることを示唆しているとも云えるであろう。喚言すれば、儒・道・仏三教の相剋は膨大な時間の流れを経過してすらもなをも解決しえないということである。すなわち、儒・道・仏三教を同一の俎上にのせ、それを一方は思想とし、他方は宗教としその優劣を幾ら論じても結論を導びくには至らないということである。さらに云うならば、一宗一派に属する宗教人にとっては、己の信奉する宗義を一大事とするのであるから、三教一致説への結論なり解決は極めて

困難とならざるをえない。己の信奉する宗義とて、それはあくまでも主観的思惟にもとづくものであるから、それをもって三教の合一をあるいはその優劣を論じても客観的な尺度がそれに付随しないということである。

(未完)

この小論に関しては、昭和五十七年度「日本印度学仏教学会」第三十三回大会においてその概略を口頭発表し一部は紀要原稿としたものである。

- ① 『統曹全書・法語』五一八頁。
- ② 後述するところに明らかなように、洞門においても儒者の排仏論に対する駁論の中では習見されるところであるが、書として纏まったものとしては恐らくこの二巻のみではなからうか。
- ③ 福井康順博士『道教研究の基礎的諸問題』（『東方宗教』第二十五号・一頁）参照。
- ④ 樽林皓堂博士『道元禅の研究』、博士は「宋朝禅批判と正法禅の昂揚」節で宋朝禅の歪曲性を八項目に分類し詳述されておられる。
- ⑤ 篠原寿雄先生『道元禅と道教』（『東方宗教』第三十三・三十四合併号）一九頁参照。先生のこの好論には、特に道元禅師の道教観に対して多くの学恩と示唆とを得させていただきました。特に記して感謝する次第です。
- ⑥ 『嘉泰普燈録』の序文は、『正統蔵二乙一〇・一』。
- ⑦ 鏡島元隆博士『道元禅師とその門流』の中の「道元禅師と宋朝禅」節一四頁参照。
- ⑧ この問題については、かつて『宋学研究』第十五号において『道元禅師における引用外典の基礎的研究（三）——『正法眼蔵隨聞記』を中心にして——』の中で論じた。
- ⑨ 前出『統曹全書』五一八頁。
- ⑩ 『大正蔵』第四六卷二四七頁。道元禅師は、「老子云云」までを引く。
- ⑪ 前出『統曹全書』五一八頁。
- ⑫ 右に同じ。

⑬ 前出『続曹全書』五一八頁下。

⑭ 右に同じ。

⑮ 前出『続曹全書』五一九頁上。

⑯ 前出篠原先生の「道元禪と道教」参照。

⑰ 下出種與氏『道教——その行動と思想』（評論社）「日本の道教」節六六頁で「道教の教学がかなりの程度に日本に理解されていたのではないかと一応は考えてもそう無理とは思われない。しかし、それを過大評価して、道教の信仰が日本でもできつつあったとするのは、やはり軽率であろう。（中略）専門家としての道家や道士によるのではなく、あくまでも文献を通じて自力による知識であり、理解にすぎなかった。」と云っている。

⑱ 衣笠安喜氏『近世儒学思想史の研究』「近世朱子学の成立」で、氏は「中世から近世への社会思潮の基本的な動向は、仏教的来世観から儒教的現世観への転換としてとらえることができる。この転換の過程を思想の上で端的に示すものとしては、中世禅林の儒・仏・神「三教一致」論における仏教的思惟の優位から儒教的思惟の優位への転換、ついでには戦国期から近世初期にかけての「天」「天道」観念の現世化があげられる。前者の三教一致論が、伝統的思想の内部における近世化の過程を象徴的に示すところの指標的なものであるとすれば、後者の「天」「天道」は、変転極まりない乱世が統一権力の制覇に帰する間の社会動向のなかから生み出された生活経験的観念のひとつの集約である」と云っている。

⑲ 前出『続曹洞宗全書』五一九頁下。

⑳ 右に同じ。

㉑ 久保田量遠氏『支那儒道仏交渉史』二二二頁参照。

㉒ 久須本文雄氏『宋代儒学の禅思想研究』第一章「宋学の起因」において、「宋学勃興の原因については、諸説が存して一定していない。」としてわが国における諸家の説を十例ほど挙げている。

㉓ 前出久保田氏二三九頁。

㉔ 辻善之助氏『日本仏教史』第四卷三七二頁参照。

㉕ 拙論『永平和尚業識図考』（『印仏記要』二十七—二二）

②⑥ 拙論『独庵玄光師の特異性』（『印仏紀要』第二十五―一。また『宗統復古史上における独庵師の位置』（『印仏紀要』 八一―一。

②⑦②⑧②⑨③⑩ 『曹全書』語録二、四九三頁。

③① 『心学典論』四巻は次のような構成になっている。（第一巻）宗原・大乘・円教・別伝。（第二巻）性修・長養・論定・宗師・不立・儒教。（第三巻）道教・釈教・外魔。（第四巻）華梵・文学・詩偈・總序の十七項目に及んでいる。

なを、この『心学典論』と後述する『駁辨道書』については、当時の禅者と儒者との対立であるので、当時の思潮の中にあつて如何ように相剋しているかの点については後日を期すところである。

③② 『大正蔵』第八二巻六六六頁下。

③③ 前同書、六七〇下〜六七三下。

③④ 前同書、六七三上。

③⑤ 前同書、六七三中。

③⑥ 前同書、六七六上。

③⑦ 『駁辨道書』二巻は『続曹全書』法語に所収。

③⑧ 前出辻氏『日本仏教史』第十巻四四〇頁参照。

③⑨ 駒沢大学図書館蔵本。

④⑩ 右、第一帖。